

「住まい」と「家庭」思想 明治後半から大正期を中心として

栗原 葉子

明治半ばに「家」理念への抵抗や批判として、「家庭」という思想が新鮮な響きをもって登場し普及していったとき、人々は新しい精神の容れ物としてどんな造形を思い描き、図面におこし、「住まい」に具現化しようとしたのだろうか。また逆に、住まいの形に「家庭」という思想はどのように映し出されたと言えるのだろうか。言説としての「家庭」を、家庭の器ともいべき「住まい」を軸に検討するのが本稿の目的である。

（１）藤村の『家』と啄木の「家」

日本近代史を考える上で、認識枠としての「家」の問題は、ぬきさしならぬ比重と広がりをもっている。それは「近代的個性の形成を阻止した最大の要因」であり、日本近代の自我形成の歴史はそれゆえ「家からの解放を求めるさんたんなる抗争の歴史」¹と橋川文三は記した。そうした「家」の桎梏を描き続けた典型例として島崎藤村の小説『家』²があげられるが、これを、ほぼ同時期に発表された石川啄木の詩「家」³と比べる時、表象として描かれる住居イメージの懸隔の大きさに驚愕させられる。

藤村の『家』は、「家」制度を社会構造として捉えて批判するという姿勢に欠如しているが、視線の座標を古い家屋内部に極限することによって、かえって「家」制度の「息苦しいまでの重圧感 - そこに住む人間をつぎつぎに破滅させていく非情な構造を生き生きと描出」⁴している。上巻執筆と下巻執筆との間には妻冬子を33歳で逝去させ、その前にも既に娘三人を次々と、恐らくは、貧困による病によって亡くした藤村には、明るい家庭が描けなかったのも無理のないことだったのであろうか。作品には夫婦の人格的結合による家庭生活も構想されているものの、家庭の具体的造形はきわめて希薄である。⁵

これに対して啄木の詩「家」はふんぷんたる西洋趣味の「身もよじれんばか

りの憧憬と羨望」⁶を歌う。自身の放蕩無頼・無責任の結果とはいえ、26歳で死を迎えるまで貧困はたえず啄木を脅かし続けた。嫡男として彼の肩にかかってくる父母の「家」を維持することからも、妻との新しい家庭を築くことから逃がれ続け、貧困と病の中で実現する筈もない、凡俗なまでのプチブル家庭の夢、文字通り幻楼を描いている。プロレタリア詩人啄木がこの詩を書いたのは、優れた社会評論として著名な「時代閉塞の現状」⁷を執筆した翌年の明治44年であり、また死の僅か10ヶ月前のことだった。卓抜した天分と社会に対する鋭い観察眼によって、「家」制度の封建制を批判した啄木であったが、やっと恵まれた男児として父母に極度に甘やかされ、即ち、実際にはむしろ「家」に庇護されたのであり、また、自己中心的な驕慢な幼児性やナルシズムから終生脱することができなかった。

ここではしかし、文学的論議は別としよう。黒々とした太い梁のわたった旧家の藤村の家屋と、都市郊外に建つバルコニー付きの啄木の洋館。この二つの家屋の差異を単なるモノの形の差異としてなく、それぞれの精神の容れ物として捉えるとき、二つの懸隔の間に、「家」から「家庭」像が創出されていく思想史的な展開過程を見ることが出来るのではないか。それが私の起点である。家屋の様式と住み手の心性との間に一定の相関関係や法則があるとは到底言えない。だが、「住居もまた、生の展開の一部である以上、なんらかの意味で「故郷」たりうるものでなければならない」。⁸住み手である人間が歴史や社会の中で生きている限り、「住まい」にも時代の思想は必然的に映し出されるだろう。本稿はこのような視点から、藤村の『家』的家屋と啄木の「家」的家屋とのイメージのズレの背景を探ろうと、「住まい」というモノの歴史にそって整理してみたものである。

(2)「住まい」の歴史

人々が住まいに対して、雨露を凌ぎ寝る食べるという機能以上のことを望み、それを実現化できるようになったのは、近代に入ってからと言ってよい。「人類は長い間 ふたつの住居しか持っていなかった。一つは館、もう一つは小屋、大部分の人は小屋に住んだ」。⁹やがて、小屋に住んでいた大部分の人の中から、従来の生活様式に対する批判と西洋憧憬によって「もう一つの生活価値 - 知性的、合理的、人間的、家庭的な生活という価値」¹⁰を学びとる人が出現してくる。日本近代住宅の変遷は、形式的にはもっぱら西洋化として進んだが、また

それは思想史的にみれば、近代的「個人」の発見の歴史であり、自覚的主体者となった個人の心身の居場所としての「生活」の発見の歴史であった。そうした個々人が営む家族の生活は「家庭」と呼ばれ、それを容れる容器として初めて「中流住宅」が注目された。このような意味の「住まい」の歴史について、時代順に見ていこう。

第1期：「生活」の発見（明治初め～明治30年代半ば）

明治政府にとって、それまで全国各藩に分かれている民衆をひとつの近代国家の国民としてまとめあげる「国民化」の問題はきわめて重要な課題であった。新政府は矢継ぎ早にその整備につとめ、明治22年の憲法公布と31年の民法の施行によって、国家意志を末端機構としての「家」に浸透させる骨組み作りに一応の決着を見る。次にはこの国民支配の装置の中身を、「家」理念によって埋めていく段階に入った。明治の幕開けからほぼ30年。村落共同体的イエの実態の解体と反比例する形で再編・強化された明治的「家」の理念は、以後次第に人々の意識の内側に浸透し、法と道徳にまたがって強い規範力をふるうことになる。人々は一方ではそれへの同化感情を強めたと同時に、他方では「家」規範との亀裂を意識し批判を強めていったのである。さて、こうした「家」に対する批判や抵抗を担った言葉として、新しく「家庭」の語がメディアに登場するようになったのは明治20年代に入ってからであるが、それが一般へ普及してくるのは、上述した明治的「家」の骨組みが出来てその中身の理念¹¹が埋められ強い規範力を持ち出す時期、即ち日露戦争を境とする明治30年代半ば頃と見てよい。

第1期の思想史をごく簡単に言えばこのようになるが、維新以来、人々を現実に見せさせたのは思想や制度や法律であるよりも、西洋文明の到来を鮮やかに視覚化させるガス燈や機関車や洋館であっただろうことは想像に難くない。明治の近代化とは、要するに西洋に追いつけ追い越せの西洋化を意味したが、洋装・洋館の端緒を切ったのは天皇である。従来、天皇が御簾の中に隠れた存在であったのに対して、明治天皇は全国行幸まで行って積極的に民衆の前に姿を現し《権威を視覚化》した。洋装の天皇の行幸御殿として、全国各地の華族が洋館を従来の伝統的和館に付設する形で導入したのが、住まいとしての洋館の始まりであるという。¹² 洋装・洋館の図式は風俗の表層的出来事ではなく、新しい時代の権威を視覚化するシンボルであり、「本質的には政治的かつ知的

な次元の変革の一部」¹³なのであった。それらは次第に階層下降して伝播していくが、服装とは異なり多大な経費を要する住宅建築は、上層階級から中間層へと普及するまでには相当な時間を要する。そもそも、中間層というような社会階層自体がまだ台頭していなかったからで、その出現には産業化の進展に伴う社会的・経済的発展が必須条件である。

富国強兵を旗印にしてスタートした近代日本が、日清戦争に勝利し国家として自信をつけはじめた明治30年、尾崎紅葉が『金色夜叉』を読売新聞に連載。自分を裏切った恋人に高利貸という、文字通り「金」の夜叉となって復讐する筋書きで大好評を博した。資本主義経済の発展に伴う金本位・モノ本位の風潮の現れであったろう。同年7月には「造家学会」が「日本建築学会」と改称。¹⁴ 秋に作家幸田露伴が「家屋論」を発表。翌31年には『時事新報』に土屋元作の「住宅改良談」が29回連載され、また同じ31年に日本建築学会の機関誌『建築雑誌』10月号(No.142)に、中流向け専用住宅の平面計画に関する岡本鑿太郎の論文「和洋折衷住家地絵図に就て」と、12月号(No.144)に北田九一の論文「和洋折衷住家」が相次いで掲載された。

露伴の「家屋論」は住宅改善の口火を切った論文として位置づけられる。レンガや白亜の洋風公共建造物が急速度で建築されていったのとは対照的に、庶民の住居は江戸の名残りをとどめ、職住併用の形式が大勢を占めていた。こうした現状に対し、露伴は「一日の労苦を忘れ得べきまでに職業的塵埃毫も及ばざる平和清康の家庭に在って、其妻君其愛児と與に談笑飲食して充分心身の暢適安慰を得せしむる」¹⁵ 家、即ち、都市人口の一部に新しい社会階層として発生した俸給生活者の安住生活を叶えるには、職住が分離した安息専用の住宅が必要だと説いたのである。¹⁶ 翌明治32年には、前述した土屋元作の連載「家屋改良談」連載が単行本となった。多くの人々が住まいを生活改善の面から考えはじめていたことを示すと言えよう。土屋論は建築家でないため、技術的科学的面には触れず、もっぱら家屋内部の生活に批判の目を向けているが、「日本家屋の不便不潔を痛罵し、家屋改良の急なるを説き、虚飾を軽じ実用を尊び、跪座を変じて踞座となし、各室を区別し」と、後の住宅改良運動の重要テーマとなるイス座式への改良や各室の独立性を主張した。『女学雑誌』(No.488、明治32年)がそれを全面的に転載した事実は、啓蒙の域を出ないものであれ、土屋論の思想的な新しさに対する強い共感を示すものにほかならない。

さて、露伴及び土屋の提案が言説としての「住まい」に過ぎず、非建築家によ

る住宅改良論であったのに対して、二人の提案に含まれた「生活」思想の観点を受け継ぎ、建築専門家から在来住宅批判の形で提案されたのが、『建築雑誌』に掲載された岡本と北田の和洋折衷住宅の提案である。¹⁷ 平面図が示され、実行を踏まえての提案である点で、これまで論より一步踏み出したものであった。いずれも洋風化の方向にあり、また推進の主体者として新興の中産的階級が想定されている点も共通しているが、両者の採り入れ方には差異がある。岡本が日本住宅の欠陥である暖房設備の欠如を補う意図から、洋風住宅のシンボルというべき暖炉を各部屋を導入するという、いわば住宅全体を洋風化する和洋折衷案であったのに対して、北田案は在来の和館の玄関脇に洋室の応接間を「木に竹をつぐ」ように付設する、部分的和洋折衷案であった。「前近代」が「近代」を装った日本近代思想の重層的構造とよく似て、これなら生活部分を旧来のままにしておいて、新時代のシンボルである洋風を外観上表現できる。建築思想としては貧困でありながら、岡本案に比べて安価で簡便であるため、以後、北田式の部分的折衷案は戦前・戦後を生き続け、日本の中流住宅¹⁸の祖型となっていった。

第2期：言説から具象化へ（明治30年代半ば～明治末）

北田案的な建築思想によって、《中流住宅＝洋風住宅》の図式はこの時点で安易な妥協、一種の矮小化の方向に向かったと言える。洋風住宅が内包していた、中身の生活意識変革の要素は、従来の日本の生活意識の本質に及ぶことなく、皮相的な段階に止まったのである。しかしながら「木に竹をつぐ」ように和館に洋風応接間を付加した北田案は、安易であるだけに普及もしやすい。部分的であれ、「洋風」の住宅が量的に拡大普及した事は、日本の住宅史上無視できないだろう。だが、さらに重要なのは、それが「思わざる効果」¹⁹を家族生活に及ぼすことになったことであった。従来の和風住宅は、客間重視、プライバシーの無視、各部屋の機能の不明瞭性が大きな特徴で、即ち、単に形式のみでなく生活思想を含めて家族員の「個」の確立度が低く、家族の私的な空間は圧迫され、家長中心の公的な接客空間が重視される空間構成であった。ところが洋風応接間を付設する北田案によって、公的な客間空間が私的空間と切り離され、翻って和風空間は家族専用の解放区としての性格を持った。客間の「ハレ」部分が南面していた従来の住まいから、玄関脇に接客用の洋間が置かれるようになったため、家族の私的生活空間が南側に進出。住まいの重点は「接客」

から「家族生活」へと移動し、家族生活の心身衛生上の進歩をもたらした。これはまた、家族生活における接客機能を果たす公的空間が夫領域として部分的に限定されたことによって、逆に「寝る・食べる・憩う」という、住まいの本来的な役割を担う空間が妻や子どもの領域として解放され、即ち、住まい全体は「女性化」し、「私化」するという思想史上の変化を意味したのである。

先述したように言葉としての「家庭」は明治 20 年代に登場したが、牟田和恵『戦略としての女』によれば、明治 30 年代に入ると『六合雑誌』、『中央公論』、『国民之友』などの総合雑誌において家庭論が隆盛するが、30 年代半ば以降になるとそれら総合雑誌から家庭論が外れていくようになる。²⁰ 三鬼浩子編「近代婦人雑誌関係年表」を見ても、総合雑誌からの家庭論の撤退とまるでちょうど入れ替わるようにして、「家庭」や「婦人」の語を冠につけた女性向け雑誌の創刊が顕著となり、衣食住の生活関連記事が頻繁に論じられるようになったことが窺える。²¹ 従来のある生活を見直し、その具体的改良を求める気運が、社会的に盛り上がっていたと言えよう。

個人住宅問題は重要視されず、せいぜい部分的な構造や技術的改良に関する声が散見されるのみだった建築専門誌『建築雑誌』にも、在来の和風住宅の改善が「問題」として浮上してくる。明治 36 年にはこうした新時代の「生活」思想を盛り込んだ建築論が相次いで提示された。米国留学した滋賀重列の「住家」(『建築雑誌』No.194,196,199,202)、欧米建築を視察した塚本靖の「住家の話」(同誌、No.199)と矢橋賢吉の「本邦における家屋改良談」(同、No.203)の三論文である。三人とも西洋を体験したことによって、実感をもって生活面まで踏み込み、日本の住意識の低さや日本家屋の「批判というよりむしろ否定」²² 論を展開する。滋賀は、家屋は雨露を凌ぎ生命を支えれば事足りるのではなく、人智の発達は衣食住の生活に表れるのであって、理想的住家は堅牢・衛生・便利・愉快・経済・美観の 6 条件を基礎に成立するものであること。住家は個人のものには違いないが、同時に「国家の一装飾、都市の市街を飾る置き物」というべき都市の共有物であること。また、時勢は平民化の方向にあるのだから住まいも平民化すべきで、そうならないのはちょうど「口に文明開化を唱へて頭に「チョン」髷を戴き腰に大小を帯ぶるが如し」²³ などと主張した。

太田博太郎『住宅近代史』によれば、滋賀・塚本・矢橋論の共通点は、住宅の構造と衛生設備に関連する技術的問題、生活思想に関連して、プライバシーの確保、および主婦労働の軽減の問題、座位式の問題。住宅建設および

経営上の経済性に関する問題、以上の4つに整理できる。うち、家族観と住宅観に関して影響を持つのはとであろう。滋賀は前掲「住家」で、建築家は主婦の便を考慮して設計すべきであると語り、また家族とは食後は「一室に会し、冬なれば火を擁して雑談に時の移るを忘れ、夏なれば縁側に出て涼を納る」等、家庭団欒の構図を示している。また、滋賀と塚本は言葉こそ異なるが、個人の権利としてプライバシーを論じた。「家庭生活におけるプライバシーと、主婦労働の軽減について、わが国住宅史上はじめて、ある深みを伴って問題にされた」²⁴のである。明治初めに福沢諭吉が言った「男も人なり女も人なり」の男女平等思想や天賦人權論にもとづく個人の尊厳の思想が20世紀に入ってようやく「家庭」生活の器についての思想に反映してきたと、太田はこれらの住宅論を高く評価し、その上で明治30年代半ばの段階で、「少なくとも、思想的な面では、新興中産階級のための住宅の準備は完了した」²⁵と、これらの論文の主張を建築思想的に位置付けている。

だが、実際には三論文が主張したような考え方を実現することは困難であった。否、不完全な形でさえ、その具現化までには更に相当な時間を要した。大量の普及に及ばなかったという点で、机上の論に等しかったのである。その主張の生活改良のポイントの一つは、「茶の間の南面化」であるが、「平面図集を見る限りでは、大正期までは敷地や坪数の制限から、茶の間が南向きになる場合はあっても、積極的に茶の間を南向きにとろうとする姿勢はほとんどみられな」²⁶かった。知識階級のシンボルとして、洋風化や生活改良に熱心でも、自宅は和風でなければ寛げないという人も多かったであろう。頭の中は新思想をすぐに吸収できても、体にしみついた生活習慣や感覚はそう簡単には変わるものではない。しかしながら、世紀も変わった日露戦争後の明治30年代半ば過ぎは、産業・経済的にも、社会的にも、建築面でも、新しい転換点でもあった。東京市の区画整理が着手され、名前からして中央集権的権威を象徴するような東京駅、帝国劇場、国技館の建設計画がはじまる。鉄筋コンクリート構造の学問的移入、板硝子の本格的国産化が計画されるなど、技術面でも飛躍的な進歩があった。

こうした流れを受け明治41年、中流住宅歴史上で注目される論文が出る。西オーストラリアのバンガロー式と呼ばれる住宅を、イギリス建築学会誌から紹介した田辺淳吉の「西豪州の住家」(『建築雑誌』No.253)である。建坪4、50坪程度のその家が、中央に廊下をとり各室が独立している点に注目した田辺は、

それを日本に応用したらどうかと提案。衣食に比べて住分野の改良が、また公共的建築に比べて一般住宅の改良が甚だ遅れていることに触れ、「社会活動の重要な地位を占める」²⁷ 中流階層の住宅改良に重点を置いたのである。田辺案は日本での実現化にむけての経済的考慮から、平面形をコンパクトにした 4、50坪中流住宅であるが、日本在来の住宅では暗くて通風が悪いと嫌われていた、いわゆる「中廊下」式を採用し、部屋の通り抜けを避けて各室の独立性とプライバシーを優先した。これによって、再び脚光を浴びることになった「中廊下式」と呼ばれる形式の住宅は、それ以後、大正期の住宅設計コンペでの入選独占を経て、一世を風靡するほど広く普及し、昭和戦前に至るまで典型的な日本の中流住宅様式となった。この点で田辺の指摘は「中流住宅の方向を正しく先取りしたもの」²⁸であったと言えるが、結局、主座敷に連続した和室を平面中央に配する和風住宅の系譜であるために、プライバシー確保は不十分で、「生活思想的には、古いものを温存する結果」²⁹となった。

田辺が洋風住宅の平面図上の紹介に止まったのに対して、翌明治 42 年、橋口信助はアメリカからバンガロー式の組立住宅を持ち帰り、それを中流住宅として日本で販売する住宅専門会社「あめりか屋」を開設。当時急成長していたマス・メディアを利用し、都市中間層を購買対象にして認識を広め、経済システムの中に「商品としての住宅」を導入する。明治 34 年から 42 年まで米国で長く生活した橋口は、日本の家長中心的な家族観や家族生活を転換するためには、「器としての住宅の洋風化、とりわけアメリカ化が必要との考え」³⁰があった。こうして発売されたあめりか屋中流住宅は、大正期にはひとつの理想像として新中間層の知識人にもてはやされるまでに流行する。³¹

その背景となった当時の社会的・経済的状况は、次のようなものであった。日露戦争以後、とりわけ第一次大戦後には、社会の近代化と産業の飛躍的發展によって、官吏や職業軍人や教員や会社員など、頭脳労働という労働形態、俸給という所得形態、資本家と賃労働者の中間という社会構成上の位置と生活水準の中位性を特徴³²とする新中間層が大量に生みだされた。³³ こうした都市の新中間層の核家族率はかなり高い。大正 9 年の第 1 回国勢調査を分析した戸田貞三によれば、2 世代以下で構成された家族は六大都市の公務自由業家族の場合 84・8%に達している。³⁴ このような家族はそれにふさわしい生活のあり方やそれに関する知識を求め、伝統的な経験知に代替する新しい知の獲得と実践に熱心になった。明治 30 年代半ば頃には女子教育の浸透によって、³⁵ 活字を読める

女性が増加し、新聞の家庭小説や女性雑誌の読者層となった。明治30年代半ばから大正期を通じての女性ジャーナリズムの隆盛はまさにこのような社会を背景に、新しく台頭した中間層を中心とする「生活」への関心によって支えられた。³⁶ 橋口は人々のこうした「生活」への関心を、目に見える商品住宅の形にして提示したのである。

第3期：「生活」運動へ（大正期）

住宅の商品化において画期的な先駆を果たした橋口は、生活の改良を社会的・文化的な運動体としてまとめあげていく上でも先導役を果たした。橋口は大正4年から「生活改良会」設立のため奔走し、大隈重信を始めとする総勢134名もの各界の錚々たる有力者の協力をとりつけて会を立ち上げ、翌年には住宅専門の機関誌『住宅』を創刊するなど、実践活動に乗り出している。橋口の本質的課題は、単なる「家屋」改良ではなく、「生活」の改良なのであった。橋口の情熱もさることながら、多くの人が協力を受諾した点にも、「生活改良」に対する当時の人々の関心の高さが窺える。「生活改良会」の設立は、よりよい「家庭」や「生活」を目指す思想が、明治期以来の啓蒙的「言説」の時代から、積極的「実践」の時代へと転換したことを意味するものであった。

生活改良会の設立と同じ大正4年に、約2カ月間にわたり上野不忍池畔で国民新聞社主催で、「時代に適合したる家庭及び家庭の生活を、理論の上に説かずして、ありのままの実際に示さん」ことを目的に家庭博覧会が開催された。会場には衣食関係の出品物と並んで、公募出品された住宅の実物模型が展示された。³⁷ 主催した国民新聞社も住宅を出品。東京大学の伊東忠太の指導の下に、後にF・L・ライトの弟子となり帝国ホテルや羽仁もと子・吉一の自由学園建築に関わった遠藤新が設計を担当。四人家族に女中一人の中流家庭モデルが構想され、建坪44・5坪、工費三千円の条件付きで計画された。「主人本位から家庭本位へ」が伊東の設計趣旨であり、遠藤は居間・食堂が南面し、書斎・客間はイス式で、各部屋は独立し、子供部屋を有す家に具現化した。あめりか屋も郊外住宅のモデルとして小規模の洋館を出品した。

ちょうどこの頃、三角錫子に出会ったことが橋口を前述の「生活改良会」設立につき動かすことになる。常盤松女学校を創設し、教育界や婦人思想界で活躍していた三角は、家事と仕事を両立させたいという自身の切実な実感と体験から、女中なしでも生活できる作業能率（動作経済）のよい家屋、とりわけ台所の

改善を求めた。住宅改良会は、こうして「橋口の建築学サイドからの問題意識と三角という家政学サイドの問題意識」³⁸との結び目に、橋口自身の使命感が加わって成立したのである。

大正期には「生活改良会」のほかにも、住宅改良を趣旨とする組織の設立が相次いだ。特記すべきは大正9年設立の文部省管轄の「生活改善同盟会」で、即ち、民間主導で進んできた生活改良の動きに、国家が乗り出してきた事である。設立の直接的ひきがねとなったのは、不況と社会不安であった。第1次大戦中の好景気は、直後にインフレ現象を招き、米価が暴騰して大正7年の米騒動につながった。³⁹ 生活の合理化や節約を推進することは、もはや家庭内問題でなく、国家行政上の政治的問題となっていた。急激な都市膨張に見合わない住宅数不足も深刻化していた上に、細民の不良住宅問題も加わって、すでに都市問題＝住宅問題といわれる現状だった。人々の住居水準を高め、最小限の個人住宅を規格化することは今や国家問題であり、「生活改善同盟会」はこうした政府の住宅行政のいわば実践部隊なのであった。その設立に先立ち大正8年に、政府は初めての統一的建築法規として「市街地建築物法」と「都市計画法」を制定し、文部省主催で「生活改善展覧会」を開催している。出品された住宅には集合住宅、規格住宅、共同住宅、田園都市構想など新発想の住宅が多彩に出揃っていることから、当時の住宅問題に対する意識の高まりが窺えよう。

こうして生活の改善運動は、官民あげての社会的うねりとなって推進されることになる。その運動の特徴は、生活が民間だけでなく国家行政の関心課題になったこと。主婦と子供の地位向上を軸にしてすすめられ、台所改善や子供室の要求となったこと。「一家団欒」を標語に、言説における居間中心型様式が出現したこと。生活改良について女性知識人が論陣で大活躍した等が挙げられる。こうした運動の頂点ともいえるべき出来事が、大正11年東京府主催の東京上野平和博覧会である。初めて実物住宅が14棟出品された住宅展示場は「文化村」と命名され、20坪以下の2例を除き12棟全てが洋風椅子座の居間を中心におく住宅様式が並んで、来場の人々の目を奪った。

このように展開した大正期の生活の改良・改善運動は、一方では人々の「家庭」や「生活」意識を高め女性の地位を向上させた。しかし他方で、家庭は公的機能を喪失して私化を強め、女性を「家庭」領域に囲い込んで性別役割分業を固定化してしまうことにもつながった。その経緯は、総合雑誌から家庭論が消えて、家庭がもっぱら女性雑誌に限定化されていった経緯とよく似ている。平和博覧

会の翌大正 12 年、関東は大震災に見舞われる。未曾有の住宅倒壊と炎上によって、江戸的名残りの大半は消えて住宅需要が急増する。都心の土地価格が高騰し、更なる郊外への外延化、職住分離の核家族化が一挙に推し進められた。震災の義援金を基金に、その翌年に半官半民で「同潤会」が設立され、⁴⁰ 昭和初期には新聞社主催の住宅設計コンペや図案集出版が相次ぐなど、必要に迫られて住宅建設熱が盛行した。だが、大正期の熱病のような洋風憧憬と、それが内包していた「生活」や「家庭」に対する内側からのまなざしは、軍靴の響きが大きくなるにつれて片隅に追いやられる。生活運動で高まりを見せた住意識も十分に進展することなく、昭和の敗戦まで停滞し、ひいては戦後高度成長期に《世界の GNP とウサギ小屋》と皮肉られる、ねじれた「住」の近代化現象をもつに至るのである。⁴¹

まとめ

明治半ば以降、「家」への批判とそれに変わる新しい価値観を担って登場した「家庭」の具象化の変遷過程は、第 1 期では、「木に竹をつぐ」折衷案に典型的に現れているように、生活意識の本質に及ぶことなく皮相的な段階に止まり、生活空間は「女性化」「私化」する方向に向かった。第 2 期では、住まいの重点が「接客」から「家族生活」に移動して「生活」への関心が高まり、商品住宅の形での実現化に至ったが、意識も担い手の中間層も不成熟なものであった。第 3 期では、生活や家庭が啓蒙的言説の時代から積極的実践運動の時代へと転換し、官民あげての運動として隆盛して、女性や家庭の地位を向上させた。だが、同時に家庭領域に国家の侵入を許す危険性を孕むことになった。以上、建築史上からも、「家」から「家庭」思想の創出とその変遷を、「生活」の発見 言説から具象化へ「生活」運動の過程として追認しえると思う。(1)で提示した藤村と啄木との住まいイメージの懸隔の背後には、例えば明治 36 年に、既に 30 歳を過ぎていた藤村とまだ 10 代の青春のさかりであった啄木との、それぞれが生きた時代の差異、即ち、上述したような、「家」から「家庭」への住まいの思想における時期的ズレがあったと言えよう。

註

- 1 橋川文三「日本知識人の思想と家」『講座家族 8』(弘文堂 1974 年) 119~120 頁。
- 2 島崎藤村「家」『読売新聞』明治 43 年 1・1~5・4。後に加筆され『家』上下巻(上

田屋 1911)として上梓。明治 31 年から 43 年夏に至る期間の旧家一族をめぐる出来事を描いたもの。明治 30 年に西洋憧憬に導かれた浪漫に満ちた抒情詩『若菜集』によって、一躍世に名を知らしめた藤村だが、近代知の獲得と自我覚醒は同時に、山深い木曾馬籠の旧家に生まれた自身の内部にひそむ憂鬱の自覚を必然的に伴う。やがて藤村は自己表現方法として詩から、いわゆる「告白的私小説」を描くようになった。『家』はそのひとつ。

- 3 石川啄木「呼び子と口笛」(『日本近代文学大系 23 石川啄木集』角川書店 1969 年)所収。初出は明治 44 年。「場所は、鉄道に遠からぬ。/心おきなき故郷の村のはずれに選びてむ。/西洋風の木造のさっぱりとしたひと構え、/高からずとも、さてはまた何の飾りのなくととも、/広き階段とバルコンと明るき書斎・・・/げにさなり、すわり心地のよき椅子も(中略)「煙草をふかしつつ、/四五日おきに送り来る丸善よりの新刊の/本の頁を切りかけて、/食事の知らせあるまではうつらうつらと過ごすべく(以下略)」と歌う。
- 4 三好行雄「近代小説における「家」」(大河内一男他『東京大学公開講座「家」』東京大学出版会 1968 年)129~131 頁。
- 5 瀬沼茂樹は、女性や家庭に注がれる藤村の「冷酷な凝視者として」の自己苛虐的なまでに「陰気な眼」の基底には、藤村自身に内在する淫蕩の血への強い本能的自戒があると論じている(『評伝島崎藤村』筑摩書房 1981 年 98 及び 207 頁)。
- 6 芳賀徹「ハイカルチャーへの夢と西洋趣味」(青木保ほか編『近代日本文化論 3』岩波書店 2000 年)66 頁。
- 7 明治末の時代状況を的確に捉えた近代思想史上の基本的文献とも云うべき論稿としてつとに著名。「時代閉塞の現状」(『啄木全集』第 4 巻「評論・感想」、筑摩書房 1967 年)。
- 8 磯田光一「戦後史の空間」(『磯田光一著作集 4』小沢書店 1991 年)151 頁。
- 9 吉野正治「近代住様式の誕生」(『講座現代居住 2』東京大学出版会 1996 年)51 頁。
- 10 吉野、註 9 前掲書、73 頁。
- 11 国を家族に擬制化する「家族国家観」としてつとに定式化されている。
- 12 内田青蔵『日本の近代住宅』(鹿島出版会 1992 年)10~16 頁。
- 13 多木浩二『天皇の肖像』(岩波新書 1988 年)45 頁。
- 14 明治 19 年、現在の東大建築学科の前身である工部大学造家学科の教官と卒業生によって組織された団体。

- 15 幸田露伴『露伴全集』第29巻(岩波書店1954年)93頁。
- 16 太田博太郎は、幕末期の身分別及び職業別人口配分や、明治時代の都市人口の増大を示す数値から明治30年当時は併用住宅が多く、露伴が専用住宅を主張しても不思議ではない状況だったとしている(太田博太郎編『住宅近代史』雄山閣1969年 82~84頁)。
- 17 内田によれば、当時の建築学界では一般個人住宅を扱うことは極めて異端的であったことが東大建築学科の卒業テーマから窺えるという。内田、註12前掲書、28~29頁。
- 18 太田によれば「中流住宅」の規模は明治40年代には30~70坪、とくに40、50坪付近に限定されてくるが、その概念は「規模よりもむしろ門・玄関・客間を備えた、紳士として恥ずかしくない住宅というほどの、性格の点に重き」があったという(太田、註16前掲書、86頁)。
- 19 太田、註16前掲書、104頁。
- 20 牟田和恵は、20年代後半から30年頃を転換点として、「それ以降、家庭や家族は公論の対象から除外され、もっぱら女性を対象として女性にのみ関わるものとして語られていくようになる」と語る(『戦略としての女』新曜社1996年 54頁)。
- 21 三鬼浩子編「近代婦人雑誌関係年表」(中嶋邦監修『日本の婦人雑誌解説編』大空社1994年)、三鬼浩子「大正期の女性雑誌」(『大正期の女性雑誌』大空社1996年)を総合して見ると、明治期から昭和20年までに創刊された婦人・家庭関連雑誌は300種を越え、うち明治末年から昭和6年までの大正期に214種が集中している。また、タイトルを見ると明治30年代半ばより末年にかけては「家庭」「婦人」が顕著で、大正6年に「主婦」、9年に「女性」、14年に「女工」が初出していて、時代思想の反映を窺うことができる。
- 22 内田、註12前掲書、58頁。
- 23 滋賀重列「住家」(『建築雑誌』No.196、1903年)6頁
- 24 太田、註16前掲書、107頁。
- 25 太田、註16前掲書、109頁。
- 26 平井聖『日本住宅の歴史』(日本放送出版協会1974年)180頁。
- 27 田辺淳吉「西豪州の家」(『建築雑誌』No.253、1908年)23頁。
- 28 太田、註16前掲書、111頁。
- 29 太田、註16前掲書、114頁。

- 30 内田、註 12 前掲書、59 頁。
- 31 大正時代の教養派の代表的存在の一人であった阿部次郎は大正 3 年刊行の『三太郎の日記』で「夢想の家」と題した章を割き、プライバシーが守られる洋室を夢想している。
- 32 寺出浩司「大正期における職員層生活の展開」(日本生活学会編『生活学』7、ドメス出版 1982 年)34～36 頁。
- 33 伊東壯「不況と好況の間」(南博編『大正文化』勁草書房 1965 年)183～187 頁。
大正 9 年で新中間層は全国民の 5～8%と推計している。
- 34 戸田貞三『家族構成』(新泉社 1982 年)347 頁。
- 35 小山静子によれば、男女平均就学率は明治 26 年の 55・8%に対して明治 35 年は 91・6%と飛躍的に上昇している。(『子どもたちの近代』吉川弘文館 2002 年 80 頁。
- 36 羽仁もと子・吉一が明治 36 年に創刊した『家庭之友』は、いち早くこうした社会の要求を捉えそれに応えようとした雑誌であった。
- 37 『国民新聞』(大正 4 年 5 月 3 日)は、連日博覧会の紹介記事を掲載したが、初日の入場者は 2 万 8626 人にのぼったという。
- 38 内田、註 12 前掲書、84 頁。
- 39 『長期経済統計 8 物価』(東洋経済新報社 1967 年)134 頁によれば、消費者物価指数は大正 5 年の 62・7 に対して、大正 8 年は 137・7、翌 9 年は 144・0 と脅威的暴騰である。
- 40 同潤会設立は日本初の本格的公営住宅事業の開始であり、国民として生活できる《住宅基準》という視点が成立したことを意味する(内田、註 12 前掲書、122 頁)。
- 41 大正期は大正デモクラシー、リベラリズム、芸術至上主義など、平明なイメージで語られることが多い。だが、そうした向日性の裏側は、「日露戦争勝利の見返りが少なすぎることを屈辱とする感性和、風説を信じて朝鮮人をゆえなく虐殺する知性との挟まれた時代」(武田信明『《個室》と《まなざし》』講談社 1995 年 68 頁)でもあった。国家による土地管理と支配はやがて満州にまで及ぶ鉄道網整備と不離に絡み合って進展し、軍国主義の足場となったことはよく知られている。なお、本稿で触れなかったが大正期の郊外宅地化については片木篤他『近代日本の郊外住宅地』(鹿島出版会、2000 年)、西村伊作については加藤百合『大正夢の設計家』(朝日新聞社 1998 年)を参照。

